
とある第六位の青髪ピアス

助けてください

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある第六位の青髪ピアス

【Zコード】

Z7916V

【作者名】

助けてください

【あらすじ】

いまだかつて学園都市の第六位は謎のままであった。だが、追われている一人の少女はその姿を田にする。全てを超える真のレベル5を、この田で、

学園都市第六位（前書き）

青髪ピアス第六位説を小説化しました！

よかつたら感想・評価どんどんお待ちしてまーす！

「ハア、ハア……」

少女は後ろを見た。

少女の視界の端に、黒いスースを着た集団が少女を追つ。

「まだ・・・追つて来てるーーー！」

再び、少女は足を速めた

「んあー、今日も小萌センセイの愛の説教で遅くなりよったわー」

Hセ関西弁を使いながら空に向かってノビをする青髪ピアス。

学園都市の空は、オレンジ色に染まっている。もつともアラド、日没しそうだ。

「はあー・・・カミやんには謎の銀髪イソーローシスターさんがいるし、土御門にや妹系メイドがあるし・・・『オンナノコ』に恵まれないのはこれでボクだけやなー」

そんな未来も希望もないような言葉をブツブツと呟きながら、青髪は適切に空を眺める

そして、もう一度、深くため息をついたとき、

青髪ピアスの脇腹に、何者かが激突した

「うおおおお！？」

180cmオーバーの体が、不意の攻撃で横に倒れる。

「な、なんや！？」

青髪ピアスは自分の状況を確認するため、前を見た。

するとそこには、紺色の髪が背中のあたりまで伸びている小柄なおつとり顔の少女が同じく尻餅をついていた

（うお、お、オンナノコや！？）

青髪は呼吸が止まりそうになる。

だが、驚くのはそれまでだった。いつものよひ、「オンナノコ」を見る目ではない・・・

明らかに、様子がおかしいのだ。

傷だらけの顔、はだけた衣服。本人も息をきらし、その場で下方を向きながらこちらの方を向く余裕すら無さそうだ。

「だ、大丈夫かいな！？」

青髪ピアスは慌てて少女の方へ駆け寄った。

少女も声を掛けられ、ゆっくりと顔を青髪の方へ向ける。

衣服はまだしも、このぐらいの傷なら病院に連れていけばなんとかなる。

「直ぐそこには病院があるんだ、一緒にに行こうや」

そう言って青髪は近くに建っている病院を指した。そして、立ち上がり、少女に手を差し伸べて立ち上がるよう示唆するが、

「た、助けて……ぐだぐだ」

「へ？」

青髪ピアスは田が点になる。

「お願ひ……助けて……」

直後、人気の無い路地に、黒いスーツを着た集団が角から現れた。その中の一人が青髪の横にいる少女を指さして何かを叫ぶと、一斉に黒いスーツの集団はこちらへ向かってくる。

訳が分からなかつた。

でも、青髪ピアスのやる事は一つしかなれりだ……

「へ、いつひじ……」

理由を聞く前に、地面に座り込んでいる少女の手を強引に引つ張り、裏路地へと逃げていく。

行き先もなく、ただ適当に道を進む。

そして、辺りの隠れるに最適な車を見つけ、車の陰に隠れ、青髪ピアスは少女の口を手で塞いだ。

少女はゆっくつと青髪の顔を見る。

横顔だけだが、もうあのぶつかつた時の、あの頬りなさうな顔はどこにも無かつた。

だが、直後、

少女と青髪ピアスの隠れている車に謎の攻撃が突き刺さり、爆発はしないまま粉々になつて辺に吹き飛ばされた

「へ……」

「へ？ お嬢さん……？」

「へ？ お嬢さん……？」

青髪ピアスは、敵の声にもかかわらず、少女の顔をのぞき込む。

少女は申し訳なさそうに下を向いたまま黙っている。

やがて黒スーツを着た一人の男が、

「そうだ。そこにいる少女こそが、我々『黒い太陽』といつ組織のボス、アリスお嬢さん。」

普通の人間なら、組織に戻るよう少女を説得させるが、青髪ピアスの行動は違つた。

「じゃあ、そこのお嬢さんが仮にもお前らのボスだったとしても、なんでこんな扱いをしやがる」

いつの間にか、青髪ピアスから大阪弁が無くなつていた。

「我々は裏切りは許さないんでね、例えボスだらうとそれ相応の処置は取る」

そう言つて、戦闘の男は懐の中を漁り始めた。

そして、拳銃を取り出し、アリスと呼ばれる少女へ向けた。

「！」

「『死』という処置でな」

次の瞬間、轟音が炸裂した。

まるで威嚇射撃のように、その銃弾は少女の横の壁に突き刺さる。

少女は、足がすくんで完璧に動けない

「こ」れが、最後だ。アリスお嬢さん、我々の所に戻つて殺されるか、こ「こ」で殺されるか

そのとき、青髪ピアスが再び少女と逃げようとしたが、立ち上がる前に青髪ピアスの背中を蹴り付ける

青髪ピアスの口から、地面に鮮血が滴る。

「青髪さん！？」

少女は青髪の元へ駆け寄ろうとしたが、青髪ピアスは手を前に出し、少女を止める

「行け・・・俺に・・・構わぬ、行け！」

「でも、でもー」

「それはさせない。アリスお嬢さん、逃げる前に仕留めるぞ！」

次の瞬間、一人の男がアリスと呼ばれる少女に銃口を向けた。まさに、絶体絶命とはこの事である。

青髪ピアスには、この少女を助ける義務なんてない。しかも、今曰いきなり会つたばかりで彼女の事は何一つ知らない。

だが、

（あーもう、くそくそくそくそーーなんでいつもこいつなつちまうん
だオレの人生ーー）

頭をガシガシと搔く青髪ピアス。けど、その行動は『覚悟』の現
れだったのだ。

直後、容赦なく拳銃は爆音と同時に火を吹いた。

一直線に少女へ向かう銃弾。けど、その銃弾が少女に当たる事は
一生無いだろう・・・

「て、テメエは、青髪！？」

「戦闘はつくづく勉強させられる。例えば、こいつのが『堪忍袋
の尾がキレた』っていう風になあ」

青髪の言葉に、拳銃を一人一つづつ持つ集団が引けを取る。

青髪ピアスは銃弾を片手で握っていた。彼の手から、煙が噴出し
ている。

（「、コイツ、銃弾を片手で取りやがった！？いや、それ以上に、
コイツは俺の足元にいて、俺が銃弾を発砲した時もコイツはまだ足
元にいたハズ・・・ってことは・・・）

男も思わず声に出してしまつた。

「コイツ、『銃弾より速い速度で移動した』ってのかよー?」

男の言葉に、今は田の前で立ちふさがっている青髪ピアスをのぞき込むアリス。

「だから『堪忍がキレた』つつつてんだろ。」

そう言って、青髪は片手の中にいる銃弾を思い出し、

「ああ、そうそう。昔、お袋に『その人の物はその人に返せ』って誰でも教わるような事習わなかつたか？」

青髪ピアスは盛大にニヤケと笑みを含み、

ホテ、これ。お前らの物だから返してやるよ。」

そう言って、手にある銃弾を集団に向かって下から軽く投げた。

普通なら放物線を描いて落下するのだが、青髪の投げた銃弾は違つた。投げた瞬間、銃弾は爆発的な爆音と破壊力を生み出し、後ろに尾を引きながらレー・ザー光線のように集団を中心から爆発させたのだ。

「ハア・・・・今更だが、もう一度『この力』を使う日が来るとはな
あ・・・」

そう言つて、青髪は倒れている男を見据えた。

次の瞬間、男の腹部を、一瞬で目の前に移動した青髪。ピアスが足
を振り下ろす。

それだけじゃない。爆発的な威力を増した足が、男の脇腹に激突
し、その地面がクモの巣のように割れる。

「が、ハツ」

男の口から、血が漏れ出した。

「何とでも言つてくれていいぜ。俺は『こんな力』を持つていて
上自分のことは悪魔だと思つていて、最低の人間だとも思つて
でもなあ、そんなクズの俺でも気に食わねえ事が一つある」

直後、青髪。ピアスは声を発した。

それは誰の声よりも重い言葉だった。

「少し裏切られたぐらいで集団で一斉に拳銃を突き付ける程、
おめえらは俺以上のクズだったってのかよ」

それだけ言つておきながら、青髪。ピアスは男を踏むのを止め、集

団に背を向けて歩いていった。

せつかく女子と巡り合えたのに、そんなチャンスを自ら飛ばしてしまった。

そんな青髪ピアスに、アリスは安心しきった顔で話しかけてくれた

「良かつた。本当に良かつた・・・」

「怖くねーのかよ?」

「つうん。自分を助けてくれた命の恩人にそんな態度を取つたら失礼だもん」

「そうか・・・それなら良かつた」

そう言つて、青髪ピアスは女子に背を向けて歩きだしてしまつた。

「ま、待つて!」

青髪ピアスの肩がビクリと震える。

振り返つた時には、アリスが困つてゐる顔をしていた。大体、予想はついた青髪ピアスは、フツと含み笑いを見せ、

「俺の家に来るか?」

「えつー?」

「どうせ、戻ったところで帰る家がねえんだろう? なら、俺の下宿先に来ていいぞ」

「え、あ・・・あ、ありがと」

精一杯に格好付けた青髪ピアスがすっかり忘れていたばかりに「あ」と間抜けな声を出してしまう

「俺の宿に来るんだつたら、自己紹介がまだだつたな。俺は青髪ピアス。学園都市の『^{レベル5}』く一般な学校に所属する、超能力者第6位の青髪ピアスだ。」

最悪の日

青髪ピアスと同棲して、早1週間が経つ。

青髪ピアスの性格からして、アリスは家事に専念せざるを得ない
だらり・・・

「ん・・・」

アリスは重たそうにまぶたを開け、すっかり明るくなつてゐる部屋
を見渡し、手元にある電波時計を見る。

現在時刻午前8時20分。

ちなみに、アリスの起床時間は午前6時30分。

「うあああつ！？寝坊したつ！」

直ぐに青髪ピアスから買つてもうつたベッドから飛び出し、急いで
服に着替える。そして、ある事に気がついた。

（わついや、私あおの家で下宿してゐるんだつた・・・前は6時30
分に起きて英才教育がどうのこうのつてあつたけど、今は何もない
や）

途端に恥ずかしくなり、アリスは顔を真つ赤にする。

そして、不意に、青髪ピアスのベッドの方を見た。そこには、用
曜日にもかかわらず、青髪ピアスが寝ているではないか。

「ううう、あ、あおーーーまだ寝てるのーー?」

アリスの慌てた声に呼応して、悪い夢でも見ていたかのように
二つベッドから起き上がる

「うわああーー?ど、どなーーしたん、アリスちゃん!ー?」

「ああ、今日学校は?」

『学校』と二つベッドを聞いた青髪は急に冷めた表情をして、

「ああ、学校はあるよ」

「な、なんで学校に行かないの?」

「行かないんやない、行きたくなーんや」

学校が誰よりも好きな青髪ピアスがだ。

そして再び青髪ピアスはベッドの中へ潜り込んでいった。

(ああ、この一週間あれだけ楽しかった学校に行つたのに・・・)

「そのままでは重い空気に潰されそうになつたので、アリスは話題を変えた。

「まあ、学生の頃は行きたくない日の「つや」「あみからね」」

それを聞いて機嫌を取り戻した青髪ピアスが「うつ」と笑つて、

「うん！まあ、今度からはサボつてもアリスちゃんがあるから寂しくはないんやけどね～」

「つ、煩惱有り過ぎ」

今にでも飛びかかりそうつな青髪ピアスを頭部へのチョップで制圧する。

「さて、私は今日の晩ご飯の調達に行ってくるから、留守番よろしくね」

「おひ

アリスは仕度を終え、玄関を出でいった。

青髪ピアスはそれを確認すると、妙に険しい顔つきになり、ベッドに再び潜り込む。

「今日は、世界で一番『最悪な日』や・・・・」

「ハハ、小さく呟いていた。

「今日は皆さんの大好きな『能力測定』の日なのですよー」

身長135cmとこつこつ二教師は教壇に立つてそう話すと、クラスは「えー」とこう声でやわめきたつ

それには参加していない上条は机に座りながら、

「今日は青髪がいないからみんな言いたい放題だな」

すると、隣にいる金髪にサングラスの筋肉質の男は

「そうだにゃー、あんだけ学校&小萌センセイ好きな奴がこの日だけは来てないんだにゃー」

一人の小声にならないたれやきを聞いた小萌先生は青髪ピアスの席を深刻そうに眺めて、

「今日も、青髪ちゃんは来てないのですか・・・」

能力測定を終えて、1日が経った。

「この日は、いつもの様に青髪ピアスは何事も無かつたかのようになじみ登校してきた。

「カミ! やへん! 今日の小萌センセイの服はピンクのワンピースやでー!」

「あ、青髪ー? つか、いぢいぢ先生の服装報告すんなーつ!」

そこには、いつもの青髪ピアスが映っていた。昨日の事には、一切触れず、まるで何事も無かつたかのように青髪ピアスは振る舞つた。

すると、そこ教室に、身長135cmのおなじみの先生が入つてくる

「あーつ! 青髪ちゃん、昨日はちよつと用事があつたんで電源きつてましたわ」

「あー悪いなー小萌センセイ。昨日はちよつと用事があつたんで電源きつてましたわ」

「と・に・か・く! 後で先生の所へ来てくださいー!」

「お、また今日もですかー! ボクはなんぼでもセンセイの所へ行つてきますでー!」

そんな青髪の様子に、汗を額に浮かべながら苦笑いを浮かべた。

「もう、ちやんと聞いてるんですか青髪ちやん！」

「ボクはいつも、耳傾けてでも聞いてますよー」

小萌先生と一人つきりで生徒指導室へ来た青髪。ピアスは、そう言つていた。

「もう、アナタはテストの点数は良いのに、いつも能力測定の方をさぼつているから、成績不振者会議で名前を挙げられるのですよー。」

「ハハ・・・テストはいつも頑張つてあるから良いんじゃないですかいー？」

「そういう訳にはいかないんですよー」

「ハア、と小萌先生は重いため息をついて、

「もう、そろそろ教えてくれてもいいんじゃないですか？アナタがいつも能力測定を休む理由」

彼らしくない程に真剣な表情をして、じばらぐの間黙り込む。

「この時、青髪ピアスはなんて思っていたのだろう……？」

そして、じづく、声を放つた。

「小萌センセイには、関係ないんや」

「や、そんな……」

「「「みんなさーセンセイ。こくら小萌センセイでも、教える事はで
あひど。」」

そう言つて、青髪ピアスは生徒指導室から姿を消した。

「この時、小萌先生は、じづく思つた。

少しづつ、少しづつだが・・・、あの青髪ピアスから、笑顔が消えつつある様な気がする。

同時刻、青髪ピアスの居なくなつた教室は穏やかな雰囲気になつており、上条も「用事がある」といつて下校していた。

そんな中、一人の男が、教室の端で、何かを握る。

（クソ、なんであんな奴らが、先生にちやほやされなきやなんねーんだよ！？）

男は、額から血管レバール。が浮き出そつた程、怒りと憎しみで一杯一杯になつていた。

（あんな無能力者のカス共カスカル。が、なんであんなに笑つていられる、なんであんなに騒いでいやがる！…）

そして男は、もう一度強く握り拳を作つた。

（俺が、排除してやる。ただへらへらと笑つてるカス共はいらない。）

そして、男は立ち上がつた。

下校するためだ。

（今は、^{レベル4}強能力者止まりだが、絶対に超能能力者まで上り詰め、奴らを潰してやる。^{レベル5}超能能力者が奴らを潰せば、みんなは理解してくれる。認めてくれるハズだ。）

そう言って、男は手にもつていた物をポケットにしまった。

それは、一見普通のミュージックプレイヤーだった。

だが、問題があるのは、中身の方である。

それは、もう既に無くなつたハズである、

^{レベルアップ}幻想御手、なのだから。

青髪ピアスが通う学校に、数日前から謎の転校生が来ているのは言うまでもない。

名は、かみやきょうすけ神夜恭介かみやきょうすけといいうらしく、とても明るく、優しい性格で、直ぐにクラスに溶け込んでいった。

おまけに、あの超エリート校常盤台中学に、恋人らしき人間がいるのだとか。

だが、今日の本題はそこではない。

そんな謎の黒髪少年神夜が、上条、土御門、青髪ピアスの3人と異常に仲が良くなり、『デルタフォース』から本当の『デルタフォース』になりかけているのだ。

まあ、別にそんな事はどうでもいい。

青髪自身、それは嬉しい事だし、歓迎すべき事である。

そんな、謎の少年を。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「おひ、青髪ー。」

朝の玄関で、後ろから声を掛けられた。

そこには、先ほども言ったとおり、黒髪の少年神夜恭介である。

「おひ、カミちゃん。朝は辛いなあー」

「相変わらず上條と被つてんのな、俺の呼び方

「まあまあ、仕方ないんぢやうへカミつて付くし、」

そんな事を適当に話しながら、二人は下駄箱に靴をいれ、上履きに履き替えてから自分のクラスへ向かう。

「なあ、カミちゃん。なんでそんなにボクに氣を遣つん?」

「えつー?」

どきり、と、神夜の肩が大きく揺れた。

「ど、どういひですか?」

「ボクの洞察力をナメンとしてや。カミちゃんがボクに氣を遣つていいのは一目で直ぐにわかる」

「……別に、気なんて遣つてないですよ、ボクはただ単に今日も青髪さんが元気だなあと、思つて見つてているだけですよ」

「ふーん、やつ Martinez 野球場おひしゃる言葉が違ひねん、元敗や」

「ふう」ハ、『JAPAN』ハ、なんぞ自分がモテ男になんなきやいけないんですかー。？」

「つるせー、転校一週間で既に5人の女の子に呼ばれ、拳句の果てには常盤台にも恋人があるとかいうあの伝説は、もう既にこの学校の隅まで知れわたっているんやでー。」

「なつ！？なんでそんな事まで知つてんですかー！？そりやあ確かに常盤台には知り合いはいますけど・・・」

「ホラ出た、この垂らしがああああああー。」

「あやめのやつー? なんだ黙りこなれや二才ないんだああー。」

そして、この青髪ピアスの所為により、神夜恭介『垂らし説』が始まつたとさ、

学園都市製の普通のミュージックプレイヤーを片耳につけた少年、
御堂みどうは制服のポケットに手を突っ込みながら、道を歩いていた。

一見普通の高校生にも見えるが、この少年は一つ、決定的な違い
があった。

外見ではない。

聞いている音楽だ。

それは、消えたハズの物。

レベルアップ
幻想御げげいごしだ。

(あとちょっとだ・・・あとちょっとで、俺も『7人の神』へと
上り詰める事が出来る。)

薄汚れた道をゆっくりと歩きながら、御堂は口に笑みを含む。

（大丈夫だ。絶対に成功できる。超能力者になれば、全員が俺を認めてくれる）

次の瞬間、御堂は見てしまった。

「！」

その姿を、この田で、

青い髪に身長180オーバーの体をしてピアスをつけた男は、香氣に道を歩るといつて、同じ道で、こちらを歩いてくる人間を見た。

その人間は、青髪ピアスと同じ学校に通い、同じ教室を共にする人間。

青髪ピアスはその場で立ち止まってにこやかに微笑みながら、

「よつ、『御堂』やないか。こんな所で向じてん？」

青髪ピアスがいつもの様子で御堂に話しかける。

対する御堂は少し戸惑つた表情で、苦笑いを生み出す。

「こ、こんな所でじつしたんですか？青髪さん」

「じつしたんのは御堂やないか、じこせスキルアウトがいつく所
やで。」

「あ・・・やつでしたね、すこません」

「じゃあ、一緒に向ひつまで行ひつか」

やつて、青髪ピアスは御堂に後ろに付いてくるよつ暗示する。
御堂は戸惑いながらも、青髪ピアスの後ろを追つてこぐ。

（どうする・・・）のまじや、チャンスを失う・・・

御堂は後ろを歩きながら、青髪ピアスを注意深く観察した。幸い、
警戒はしていないようだ・・・

そして、御堂はゆりへつと、ポケットに手を入れる。

（やねしかなこ・・・。）

そして、御堂はポケットから、小型のサバイバルナイフを取り出した。

それを、思いっきり青髪ピアスに向かって突き出す。

青髪ピアスは、全く気づかない。

「なあ、御堂。お前って、」

青髪は何を思ったのか、御堂に話しかけた。

そして、後ろの御堂の方を振り返った瞬間、

サバイバルナイフが青髪ピアスが

振り返った事によつて、空を切り裂き、青髪の胸の横を通過する。

「なつ」

青髪ピアスより、驚いたのは御堂の方だ。

一方の青髪ピアスも、驚きで頭が混乱するが、一気に体から体温が抜けていくのが分かる。

『殺される』

そう、悟った青髪ピアスは、咄嗟に御堂から距離を取る。

「み、御堂！？ いきなり何をツー？」

一方の御堂は、下を向きながら、顔に手を当てた。そこから、不気味な笑い声が漏れている

「ふふふ」

御堂は、何もかもがおかしくなった。今までの信頼も実績も、全てを吹き飛ばすかのような咆哮を、学園都市に響かせた。

「？」

「さすがは、青髪ピアス！！。悪運のつえー奴だ！！」

直後、御堂が軽く手を振った。

次の瞬間、青髪。ピアスに向けて、光線が放たれた。

「光ッ！？」

気づいたら最後、学園都市第6位の青髪ピアスでさえ、光の速度には反応できず、体に光の光線を浴びる。

貫通はしなかつたが、ハンマーで体を殴られたような鈍い激痛と共に、青髪の体が宙を舞う。

背中に地面を付けた瞬間、肺が潰されたかのように無理矢理酸素が吐き出され、視界が二重になる。

(「へ・・・・」のままじや、や・・・・れる・・・)

御堂の方も、容赦なく青髪ピアスに再び光の光線を浴びせてくるだろ？、次にこのような感覚を味わえれば、じつなるかは一目瞭然である。

「はあ・・・・つまんね。この程度でやられるとは・・・伊達に
システムズキヤン
能力検査をサボってはいられないね」

そう言つて、御堂は青髪にトドメを刺すよつて、再び手を振るつた。

一方の青髪ピアスは、何かに願うよつて、一つ大きく息を吐き、そして、

瞬間、青髪ピアスはポケットに手を突っ込む。

そこから、取り出したものは・・・・・、

光の能力者

御堂の発生させた光の光線は、青髪ピアスの体を貫く。

同時に、青髪ピアスの方からも爆発的な閃光が発した。両者の攻撃は、激突し、御堂の発生させた光線が中心から四方へ分散をせられていく。

そして、青髪ピアスの発生させた攻撃が、御堂の耳元を通過した。飛行機でも通過したんじゃないかといつ程の爆音と、風が御堂の髪を揺らす。

「くつ・・・・

御堂は眉間にシワを寄せて悔しがった表情を見せた。

(反応・・・出来なかつた・・・・だと?)

御堂は、ゆっくりと青髪ピアスを見た。彼は、両手に何かを持っている。

銀に輝く装甲と、その先から白い煙が上に向かって流れている。

「『Desart Eeagle』^{デザートイーグル}ネックス^{ネックス}か!-!」

青髪ピアスは、『デザートイーグルネックス』と呼ばれる2丁の銃を持つ。

御堂は、予告もなく再び光の光線を青髪に放つ。

だが、青髪ピアスはその光線に銃口を向け、迷わず引き金を引く。

今度は、光に対応出来る速度で、

銃口から、火が噴射する。そこから、放たれた弾丸が、御堂の放つた光線を再び中心から引き裂く。

また光線をはじかれた御堂は、唇を噛む。

「くそつー、そとかよ・・・・くく・・・・所詮は自分ではなく、他の力を借りるのかよ。」

「ああ・・・・確かに使つてる。せけエと思つてもらつて構わない

だがな、と青髪ピアスは付け加える。

「自分の能力に自信も持てねえ奴が、他人に告げ口する資格はねえぞ」

そうして、青髪ピアスから、関西弁が消えてゆく・・・

「かつての、『超電磁砲』^{レールガン}は、銃ごと吹き飛ばしたぞ」

「そりかよ」

御堂は、笑みを漏らした。

そして、自分を光の速度で飛ばし、光の剣をそのまま振るう。

青髪ピアスもしつかりと対応した、光の剣を銃で受け止める。

御堂と、青髪ピアスが再び睨み合つた。

「なら、証明してもらおうか。その手で、その力で」

激戦

御堂は光の光線を連續で射出する。

それに対応した青髪ピアスが、正確に2丁の銃で打ち抜く。

その攻防が、一体どれぐらい続いたらどう……。

精神が続く限り無制限に光を放てる御堂に対し、弾数に制限のある青髪ピアスは随分と不利なのだ一目瞭然である。しかし、片方の銃で応戦しながら素早く片手だけでリロードする彼に隙などないだろ？

そして、均衡は破られる。

大量に発せられる汗が御堂の目に入り、彼は一瞬視界を失う。その隙を見逃さなかつた青髪ピアスは、銃で御堂の足元のコンクリートを撃ち、飛び散る破片と衝撃だけで宙を舞つた。

地面上に強く背中を打ち付けた御堂は咳き込んだ。そして、再び戦闘態勢に入るべく、立ち上がるうとしたときに、御堂の額に何かが突きつけられた。

青髪ピアスの銃である。

「くっ・・・」

御堂はその場で硬直し、青髪ピアスを睨みつける。

「何と思つてもらつても構わない。御堂、お前は何故俺を狙つ?」

「ふつ・・・決着もついてないのに、何故そんな事を言つ必要がある?」

「決着なら着いた、だか」

青髪ピアスが言つ前に、御堂が間を入れる。それは、声では無く、笑い声で、

「ふふふ・・・・だとしたら、随分お前は愉快な奴だな」

「何?」

「確かに俺は、複数の依頼人の依頼を受けてお前を倒しに来た。だがなあ、そんな多数の依頼の中でお前を目的とするのは『俺の私情』でしかねえんだよ」

「な・・・・・に・・・・・?」

青髪ピアスが、言葉を失う。

「時間稼ぎは果たしたぜ。

ほうら、それは誰だと思う？複数の依頼人が同一人物に同時に依頼をするような有名人はア？」

青髪ピアスには、思い当たる。

その人物が。

そして、御堂に背を向け、走り出そうとする。だが、途端に激痛が全身を走り、痛さの余り口から血が流れ出る。

それは、御堂との対決の時に負った傷だ。その傷は、深い。今まで気がつかなかつたのが不思議なぐらいに。

それでもどうにか片足を引きずりながら、青髪ピアスは、壁にもたれながら必死に歩き出す。

そして、出ない声を必死に振り絞り、かすれた叫び声を荒らげる

アリ・・・・・ス・・・・・！

青髪。ピアスが下宿しているパン屋に着くのと、一体どれぐらいの時間が経つただろうか……？

2階にある玄関へ差し掛かった時に、既に嫌な予感はしていた。

玄関のドアが破壊されている。

焦る気持ちを必死に抑えながら、ビートにか足を運び、ドアまでたどり着く。

「アリストッ!!

自分の部屋に向かつて、精一杯に青髪ピアスは叫んだ。

だが、アリスは応答せず、代わりに部屋の床には争つた後のように傷跡と、少量の血痕が残つていた

それを見た青髪ピアスは、両膝からガクッと地面に崩れ落ちた。

「クソッ・・・間に・・・合わな・・・かつた・・・」

余りの突然さに涙も出ない青髪ピアスの頭に、ゆっくりと、そして鮮明に、あの時の映像がフラッシュバックする。

アリスと過ごした、あの時の思い出が。

『ある』色の過去（前書き）

過去と現在の変わり目に、＝＝＝＝＝を使用しています。

どちらかといと、この過去編より、それが終わった後の動きの方が
重要かもしれません。

もしよければ、最後まで、ご覧ください

『あお』色の過去

青髪ピアスの頭を駆け巡つたのは、たつた一人の少女と生きた、
日常だった。

時は、1ヶ月前へ戻る。

アリスは、いつものように家事に勤しだ。

朝食を食べ終え、そのまま二人の洗濯物に取り掛かる。今日は日曜日で、洗濯物が終わったら後は昼食の仕度まで自由時間があつた。

「ねえ、あお。どうしたの？ 朝からずっとそこで……？」

アリスは、ベランダからずつと風に当たつて いる青髪ピアスに声をかけた。

「・・・・・んあ?・・・・・ああ・・・・・」

「本当にどうしたの？なんか元気ないんじゃない？」

いつも朝から青髪ペースに圧倒されるアリストだが、今日はテンションが低すぎる青髪ピアスに逆に圧倒されている程だ。

それからまた風を浴び続ける青髪ピアスに心配しつつも、そのままそっとしておく事にした。そして再び洗濯物に取り掛かろうとした時、青髪ピアスは口を開いた。

「な、なあ・・・アリスト。」

「うふ？…どうしたの？」

青髪ピアスは苦笑いにも似た、わざと笑みを作つてこらゆづなぎにちない笑みを浮かべながら外を指差し、

「ちよつと・・・買い物、行こつか」

正直、青髪ピアスからそんな言葉が出るとは思つてもいなかつた。

「なんかあの方から誘つてくれるなんて新鮮だねー」

青髪ピアスの後ろを付いていきながらそう言つた。対する青髪ピアスの方は、何かを考えているように寡黙状態で前を歩く。

でも、アリスは気にしなかつた。

一人はしばらく歩き、第7学区のセブンスミストへやつてきていた。

なにやら最近、爆破事件がここで起きたらしく、3階の窓にはまだビニールシートが掛けられていて、未だに復旧作業を続けていた。でも、中のほとんどの店は普通通りに営業していて、青髪達が買い物をする分には大した障害にはならなかつた。

青髪ピアスは適当な文物の服屋を探し、そこに入つていく。

そして、「これがいいな」と自分の趣味で服を見つけるや否や、

「アリス。服買つてあげるから、スリーサイズ教えて」

「なつ、あ、ああ、あ、あお!？」

アリスの顔が、一気に真っ赤に染まる。それと青髪ピアスが盛大に笑い出すのはほぼ同時だつた。

「ははは!冗談、冗談やつて!最近服無いって言つてたやん、買つ

てあげるから、自分で好きな選んでええで

「えつ？ホントにいいの？」

「いいから、いいから」

ポン、と青髪ピアスはアリスの背中を押した。青髪ピアスの本来の性格に惑わされつつも、内心ではほつとしていた。

元の青髪ピアスに戻ってくれた。アリスの心配は全て、解消された。

青髪ピアスはいつの間にかいつものペースに戻っていた。

ゲームセンターのクレーンゲームで青髪ピアスは無双していたのだ。

ポンポンと激ムズに設定されたゆるゆるのクレーンをいつも簡単にクリアして景品を根こそぎ取つていく。

聞いた話によれば、100円以上の景品を取りすぎてその店のクレーンゲームは1日1回とまで宣告された程の達人らしい……

「なはは、たいした事できへんボクに取つてみれば、これぐらいし

か取り柄は無いんですよ」

「そんな事なんかないよーあおにはまだまだ私の知らない魅力がたくさー」

アリスは途中で言づのを止めた。そして、その方を指差し

「ねえ、今度はあつちやん、ね！」

「ええええええええええええー？？よりによつて一番難しい『横穴式ゲーム』！？！？しかもクレーンじゃねーやん！」

「いいから、いいからー」

アリスは青髪ピアスの腕を掴んでゲーム機の前までやつてくる。それを見た瞬間、青髪ピアスは息を飲む。

（お、思つたより・・・ムズそつやん、コレ・・・でも、普通に買つたら2万、3万ぐらいする景品がズラリ・・・ほ、欲しいイイイイー！）

そして、青髪ピアスは100円玉を入れてしまった。

そして、やつをより真剣な眼差しでゲームに挑む青髪。隣で見ているアリスまでもが真剣な眼差しになつてしまつ。

（よし・・・縦、完璧やつーつき横ー）

横に全ての神経を集中させて、挑む青髪ピアス。そして、全ては完璧に出来た。

(より こ や ー り れ で 、 賞 呂 せ ぶ)

思わずガツツポーズまで取つてしまつたと思つたほど青髪ピアスは勝利に満ち溢れた顔をした。だが次の瞬間、完璧に行つたハズが、少しだけずれていたらしく、全ては無駄となつた

「んああああああああああああああああああシ一ムズ一何コレ!?

「あははー！ さすがのあおにも難しかつたかな、」

青髪ピアスの目は血走り、連續でコインを入れる。

「 むつかああああー、どうとかかわるこやあー。」

その後、何回コインをいれたのかは言つまでもない。・・・

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「いや～結構当たんなかつたね～」

アリスがセブンスミストの屋上でオレンジ色に染まつた夕日を見ながら伸びをして、そう話した。

一方の青髪ピアスは負けばかりで肩を落としたまま、小さくため息をついた。

ふと横を見ると、綺麗な夕日が地平線に差し掛かった所だつた。

それに何故か感動した青髪ピアスは、柵に両手を乗つけて夕日を眺める

「いや～・・・」こんな高層ビルだらけの学園都市でも、こんな綺麗な夕日が見れる物なんやな～」

「そりだね、案外私も久しぶりかも」

ちょうど風が出てきた。

心地よい風が、青髪を静かに揺らす。

「いや、アリス嬢に渡さなきや いけへん物があつたんや」

「え、何何？」

興味深そうに青髪ピアスの顔を覗き込む。青髪ピアスは顔に笑みを浮かべて、

「それは、秘密。ほら、目閉じて」

青髪ピアスの眞つとおりに、アリスは微笑みながら目を閉じた。外で、青髪ピアスが慎重に手を伸ばしてるのが分かる。

「ほな、ええで。目開けて」

そして、青髪ピアスは、アリスの首元を指さした。

「し、今日一日付合つてくださつたお礼や。受け取つて」

アリスは自分の首元を見ると、そこには、夕日の光を受けてオレンジ色に染まる、綺麗なネックレスがあった。

「わあ～、綺麗」

そのネックレスを手に取り、それを傾けてみる。

するとネックレスは夕日の光を受けてまるで血の発光しているように傾ける度に光る。

「うわ～、ありがと～、『あお』」

今日で、何回目の言葉を口したのだ？・・・

そして、もう一回、その言葉を使つ。

綺麗に染まつた『あお』色の髪を持つ人間に向けて、

「実はね、私からも、『あお』にプレゼントがあるんです」

「なんや、そんなに気遣わなくていいのに」

「いいのいいの、ねえ、『あお』。私からのプレゼントさね・・・

」

青髪ピアスの目から、大粒の涙が落ちる。

それを拭つても、拭つても、まるでダムが決壊してしまったように、涙は止まらない。

「くそ・・・・・クソ・・・・・くそ・・・・・」

(な・・・んで・・・いつも、いつも・・・)

そして、青髪ピアスは、溢れ出る涙を必死に抑え、ゆっくりと、自分の耳に手を伸ばす。

そして、青髪ピアスの名前の象徴でもある、『ピアス』を耳からゆつくりと、外した。

元々、自分の能力を封じ込めるための誓いとして付けていたピアスだ。

その行為がどのような意味を成すのか、一目瞭然である。

青髪ピアスは、10年にも及ぶ『枷^{かせ}』を、外したのだ。

その時、突然、青髪ピアスの玄関から足音が響き、大声が鳴り響く。

「青髪……」

見れば、そこには、顔中に汗を浮かべ、息を大きく吐いている土御門がいた。

ピアスを外したのと、土御門がきたのは、ほぼ同時の出来事だった。

「お、おい青髪。お、落ち着いて聞け……。今日未明、ロシアから学園都市へ一通の文章が届いた。その内容は……。『宣戦布告』」

土御門に背を向けて反応の無い青髪ピアスに、土御門は大声を浴びせる

土御門が渾身の叫びを青髪ピアスにぶつかると、よつやく、その、重たい口がゆっくりと開いた。

そして出た言葉は、たった、一言だけ。

「もう、驚かないよ。」

この日、学園都市から、3人の主人公が消えた。

なんの手掛かりも残さず、突如、姿を消したのだ。

ロシアから届いた文章。それを受理した日から、『第3次世界大戦』は始まっていたのだ。

神を威嚇する者たち

長身に細身の男は、スラックスのポケットに両手を突っ込みながら、廊下を「ツツツツ」と音を立たせながら歩く。

下水道かと思つほど、薄暗く小汚い細い道をゆっくつと進んでいく。

ようやく、目的の場所が見えた。

長身の男は、ゆっくりとドアノブに触れ、その扉を開ける。ギギ・・・・と、こう鑄びた音の後に、薄暗い電球の光が男を叩く。

そこには、入ってきた男を含め、4人の人間が居た。

「遅かつたな」

一番、右端でソファに座つた男がそう呟いた。

「まあ、俺も色々立て込んでんだ。」

長身の男の言い訳を聽きながら、質問した張本人は、顔に笑みを含めて、鼻で笑つた。

長身の男は田の前にある椅子に座つて、

「みんな、よく集まつてくれたな。礼を言つよ」

男は、続ける。

「当然、俺はみんなの事を知っているが、お前らの中には知らん面子もいるだろ？・・・まずは、自己紹介からと行くか」

長身の男は、頬杖をつきながら、横で駆動鎧パワードスーツを着込んで完全武装している人間を見る。

中の人間は、少しため息を付く。

「できるだけ、正体は伏せたかったんだがな・・・ま、ここは仕方ないだろ？・・・。潮岸、それが俺の名だ。知っている者も多いが、学園統括理事会の一人。担当している分野は『軍事』だ」

バトンを受け取り、横の金髪の女子を潮岸は見た。

次の瞬間、女は、今まで開かなかつた口をよつやく開いた。

「食峰・・・・操祈」

学園都市三大学園の一つ、常盤台中学校に所属し、あの第3位超レ^{ールガン}電磁砲とも、対等に渡り合える第5位は、そのまま話を続けた。

「今のが、本当の名前ですけど・・・まあ、呼び方は『心理掌握』^{メンタルアウト}でいいですわ」

そんな事を面倒臭そつに食峰は言つて、横田で隣の同じく金髪の男を見た。

男は比較的優しそうな口調で、一いつ言い放つた。

「俺は、垣根、帝督」

そう言つた瞬間、隣の食峰がビクリと反応した。

(垣根・・・帝督ー?、まさか、奴は既に死んだハズじゃ・・・!
?)

冷静をどうにか保ちながら、食峰は蔑んだ目で垣根を眺める。

「あら、これは『機嫌麗しゆう』第2位。まさかアナタの様な人間
がまだこの世に這いつぶばつているとは、」

「おうおひ、言つてくれるね常盤台のお嬢さん。派閥だか何だかに
身を寄せてないと心配で『裏』を歩くのも平常心でいられないのは
何処の誰かな?」

垣根が笑つたよつに口に笑みを含みながらそつと、早速食峰
の右手が動いた。

スカートのポケットから簡易ナイフを取り出し、それを垣根にス
ッと横から投げつける。

一直線に垣根を貫く軌道を描くナイフ。だが、そのナイフは垣根
に衝突し、

すり抜けたのだ。

「……」

「止めとけ。これは『ホログラム』だ。俺は第1位のクソ野郎に倒されて、脳味噌だけの状態になつた。そして、科学都市の技術を使って俺の体を作り出せば、後は俺の天然の脳味噌を付け足すだけで元の俺の完成……って訳だ」

「くつ」

「止めとけ。」

今度は、垣根でも潮岸でも無く、長身の謎の男からだつた。

男は一言で、その場を牽制する。

「そういえば、この場の人間はほとんどが名の知れた人間。そう考えてみれば、見たことがないのはアナタだけよ」

「……俺はフレイ。みんなも分かっている通り、この俺が今回のリーダーを務める。」

フレイと呼ばれる長身の男はそう言った。

そのフレイの言葉に不満を持ったのか、今度は駆動鎧を着た潮岸
が口を開いた

「フレイ？ ますます聞かん名だな。それ」「元は学園都市。そんな
無名の奴に全体の指揮権を渡せる程甘くは」

「分からぬのか？」

潮岸の言葉が途中でフレイに遮られた。そして、フレイはギロツ
と鋭い眼光で潮岸を睨む。

それだけで、潮岸が恐れをなし、地面に尻餅を付いた。

「取るに足らん事だな。学園都市つてのは、そんな無名が有名かな
んてチンケな事で矛先を間違える程、馬鹿な奴らの集まり。だつた
つて事かよ」

「ぐつ・・・」

「もついいか？ 早く計画の説明をしたいんだ」

それを聞いた潮岸が、無言で泣々ながら立ち上がる。

「よしいいな。・・・・」に集まつてもらつたのは他でも無い・・・
・ここに集まつた人間は、少なからず学園都市に不満を持った人間
が集まつているハズだ。」

「学園都市統括理事会の一人、潮岸。」

「学園都市常盤台中学最大派閥『薔薇色の傭兵』^{ローズマリー}所属、食峰操祈」

「学園都市暗部組織、スクール所属、垣根帝督」

「そして、無所属の、俺」

フレイの言葉は続いた。

「色々なチームから集まつてきた俺らだが、今回限りは全てのサー
クルを無くし、俺たちの名を、神を威嚇する者たち、『神威』^{カムイ}とす
る。」

「我々は第3次世界大戦を誘発し、世界各国の中心点として学園都市及び他外国に攻撃を仕掛ける」

「学園都市第4位、麦野沈利、国外出。同じく第1位、第3位も国外出と見られており、手掛かりは一切無い。そして、第2位、第5位は、たつた今我ら『神威』の一員となつた」

「残るは第6位、第7位のみ。だが、第6位は今だ姿を見せておらず、行方不明扱いとなつてゐる」

「よつて残るは第7位、削板軍霸を速やかに行動不能にし、学園都市の勢力を徹底的に削ぎ落とす」

「そして、第3段階。これにたどり着くとき、我らの目的は達せられるだらう・・・」

では、行こうか。とフレイが立ち上がり、扉を開け、薄暗いを道を歩き始める。

その後を、食峰、垣根、潮岸という順番で付いていく。

「我々、『神威』の目的はただ一つ。」

歩きながら、そう言い、フレイが口に笑みを含んだ。

フレイ、及び『神威』の目的は、

「学園都市を、終わらせる」

この日、三人の主人公が学園都市から姿を消した。

そして、同時刻。その3人を追つた、または同伴した、3人の少

女達も同じく姿を消した。

もう既に、戦いは始まっている。

世界規模の騒乱の中心点となる学園都市に新たな戦いが生まれる。

そんな3人のヒーローが不在の中、取り残された人間たちはどんな道を歩み、どんな希望を見出すのか？

ここに3人の知らなかつた物語が、始まる。

宣戦開幕

遂に第3次世界大戦が幕を開けた。

学園都市中の学校は臨時休校、店はシャッターを完全に閉じ、地下は閉鎖状態。これだけを見れば、ここ数日間の間にどれだけの惨劇があつたのかは一目瞭然である。

だが、そんな過疎のような状況と間逆の状況が、学園都市中を包んでいた。

人だ。

悲鳴を荒らげながら学園都市を逃げ惑う人々で、逆に耳を塞ぎたくなるほどだ。

そんな人たちを鎮静させようとして出動してきたアンチスキル警備員アンチスキルでさえ、この状況を対処するようなマニュアルは残念ながら存在しない。

学園都市製のアサルトライフルを両手に持ちながら、警備員の装備を纏つた人間、黄泉川愛穂もまた、アサルトライフルを持つ手を一層強めながら、顔に汗を流していた。

学園都市に届く攻撃は、全て学園都市上空で迎撃しているハズだ。なのに、

「なんで、学園都市に攻撃が・・・！」

次々と降り注ぐ飛来物を、黄泉川はアサルトライフルで応戦する事もしないまま、呆然と地上に降り注ぐ攻撃を眺めている事しか出来なかつた。

その時、黄泉川の隣に、突然ツインテールの少女が空間を通り越して目の前に瞬間移動する。黄泉川はすかさず声を張り上げた。

「待つじやんよ、白井！お前の担当区域は隣の学区のハズだぞ！仕事をすっぽかして何処へ行くじやん！？」

黄泉川の言葉に、白井は見向きもせずに、

「お姉さまが、姿を消しましたの」

「何！？御坂が！？」

「時は既に第3次世界大戦。考えられるのは、誘拐か、はたまた自分から姿を消したか・・・どちらにしても、お姉さまの安否が気になりますの」

次の瞬間、白井は黄泉川の視界から消えた。

「待て！白井！」

黄泉川の咆哮にも応答せず、白井は姿を消した。

最後に、舌打ちをして、再び黄泉川も戦線に戻る。

「」の男もまた、学び舎の園を走り抜けていた。

もう既に此処も戦火が飛び交っている。学園都市が迎撃しているハズの攻撃が地上に降り注いでいるのだ。建物は燃え上がり、煙が空を舞いながらオレンジの空を作り上げる。

男は逃げ惑う人々を避けながら、とある方向へ足を進めた。

「クソ！なんちゅー荒れ様だ・・・」

騒ぎを鎮めようと警備員アンチスキルや風紀委員ジャッジメントが動いているが、まるで意味を成さない・・・それ以上に、一般市民の行動が、逆に治安維持機関を飲み込んでいく。

その時、学び舎の園の、一角が燃え上がった。

そして、焼けた木の破片が、雨となつて地上に降り注ぐ。ただ、それだけではない。

その下には、まだ幼い子供がいる。

「マズ、い！..」

男はすかさず走り出した。距離は約10m程。だが、木の破片は既に子供の直ぐ上までやつてきていた。

「間に、合わなっ・・・！」

そして、木は、降り注いだ。

男は両手で顔を覆つた。だが、子供の声は一向に聞こえてこない。気になつた男は、両手をどけて、前を見る。

そこには、子供も覆つように背中で木の破片を受け止めている少女がいた。服装は常盤台中学の制服。

少女は、ゆっくりと子供を見て、

「だ、大丈夫……？」

「うん……だ、大丈夫」

少女は額に汗を浮かべて、笑みを浮かべ、

「なら、良かつた……」

は目を疑つた。それ以上に、この少女の事は知つている。

「霧渓……」

男はそう呼んだ。一方の霧渓と呼ばれる少女は驚いた様に目をまん丸にして男の方を見て、

「きょ、恭介！？ど、どつしたの！？」

名前では分からぬかもしけないが、青髪ピアスの同級生、神夜恭介である。

「アホ、お前を迎えに来たに決まつてんだろ……それに、大丈夫か？」

先ほどの出来事で、霧溪の制服は所々破け、背中からは血が制服に滲んでいた。

「くつ……」

神夜も辛そうに少女を起き上がらせた。

「クソ……本当に大丈夫か？」

「だ、大丈夫だから……心配しないで、恭介……」

「待つてろ……必ず、助けてやるから……」

第3次世界大戦に、この男も加わる。

無能力者緊急招集令

「何・・・？無能力者召集令？」

青い髪を揺らしながら、青髪ピアスは眉をひそめた。隣で早歩きの青髪に付いてくる土御門は携帯を開きながら冷静な口調で事情を説明する。

「ああ、この戦争・・・無能力者は学園都市外に全員避難する事が上層部の司令で決まつたんだぜよ。この攻撃が止んだ一瞬をついて、無能力者を外部へ避難させる。」

「大丈夫なん？無能力者つつたつて、ハンパじゃねー数なんやで」

「ふん、俺が誇らしげに言える訳じゃねーんだが、学園都市の技術力をナメんなつて奴だぜい」

土御門が言つたとおり、この謎の飛来物攻撃が止んだ隙をついて、学園都市は今ある輸送航空機をフル稼働させてる。よつて、オレンジ色の真昼の空に黒い点が空を飛び交つている。

御陰で、耳が航空機の轟音でイカレそーや・・・と青髪ピアスは汗を額に浮かべる

「んで、どうすん？お前だつて能力を使えるが、レベル的には無能力者やろー。」

「うつせー張り倒すぞ。そういうお前だつて、能力が飛びぬけてるとは聞いたことなんだがな」

青髪ピアスはいつもの調子で笑つた。

こんな戦場のど真ん中で、建物が炎上し、崩れしていく中で、

「ふん、いつもの土御門らしい、ひどい口調やな！」

青髪ピアスの語尾が強調された。瞬間、土御門と青髪ピアスはそれぞれ左右に飛び。

次の瞬間、オレンジに光る光線が、一人の居た場所を焼き尽くす。

「大丈夫か？ 青髪！」

「問題ない！ 大丈夫や！」

そう言つて、青髪ピアスはいつもの慣れている手つきで2丁の銃を取り出した。土御門も、拳銃のある懷に手を差しのべる。

そして、不意打ちを仕掛けた男がちょいど地面に着地した。その人物を見るなり、二人は戦闘態勢を解除する。青髪ピアスは銃を肩で担ぐ。

「おーおーおー。なんやなんや？学園都市の第2位はこの戦争で国
籍を『ロシア』に変えちゃつたってクチかいな？」

「ちつ・・・外したか・・・」

地面に着地した男、垣根帝督は、舌打ちをした。

「あれれ？ 第2位つて第1位にブチ殺されたハズじゃ・・・？ま、
ビーでもいいんだけど」

こんな状況下で、いつものペースを保つていいのは逆に土御門と
青髪ピアスの方だった。

「ムカついた」

それだけ。

垣根帝督の、額からブチリという鈍い音が響いた。垣根は、その
鈍い音を感じながら、彼は、持てる力を開放する。

閃光が、二人の視界を奪つた。

ようやく辺の風景が見えるよつになつたのに、一体どれだけの時間がかかつたのだろうか？

「な、なんだ・・・・あれ・・・・？」

土御門は、目を疑つた。

あれは、本当に人間なのか？

まるで天使のよつな、6枚の翼が垣根の背中から姿を現していた。

「ヤベエな・・・・さすがは第2位つて所か」

土御門は、額に汗を浮かべた。

次の瞬間、6枚の翼を使って地面を滑るように移動する垣根と二人が、刃を交える。

「ハア・・・・ハア・・・・」

土御門は、顔中に汗を浮かべながら、学園都市には珍しい林の中を疾走していた。

「ヤベエ、なんだあの力ー!?

いつもの土御門らしく無い、焦りのある表情で、出口の見えない木々の間をかき分ける。

その時、土御門の隣の木が突然爆発し、木の破片を受けながら爆風で土御門は吹き飛ばされた。

足をやられた。

「ぐ、ああああああああああああああああああああああああああッ
ツー!」

ちょうど弁慶の泣き所に当たる部分に木の破片が突き刺さつており、彼は地面上にうずくまる。そうして一瞬にも、攻撃を放った垣根は土御門の前までやつてきた。

「くつ・・・・・」

「哀れな末路だ。散々俺をコケにしどいて、お前は『あの青い髪』

の奴に頼つて いるばかりか？」

「た、頼る！？何の事だ？」

次の瞬間、鼓膜を突き破る程の大爆音が辺で響いた。それと同時に、垣根は翼を使って空中に逃げ込む。

「土御門！！」

声に誘われ、横を見た。すると、そこには先ほどまで姿の見えなかつた青髪。ピアスが両手に銃を持ちながら、こちらに向かつて走つてくるのが分かる。

青髪は走りながら手を差し伸べた。土御門は必死の力を振り絞つて青髪の手を掴む。

「おわっ！？」

無理矢理。という言葉が正解だろうか？

傷を追つているにも関係無くその場で無理矢理起き上がりせて、そのまま牽制用に銃を垣根に向け、撃つ。そして再び土御門の手を握りながら走り出した。

痛みなど、考へて いる時間がもつたいない。

「うわちだ！」

垣根の攻撃をうまく避けながら、青髪ピアスは林の外まで出ることに成功した。

幸いな事に、第7学区の招集の場所として指定されていた建物は、直ぐ目の前だ。学園都市の外へ無能力者を輸送する何十といつヘリも、もう既に建物に着陸していて、乗り込みは完了している。

土御門と青髪ピアスのクラスメイトの人間も何人か居た。

次の瞬間、林を丸ごと焼き尽くして、その中から6枚の翼を生やす化け物も姿を空に現した。

その姿を、第7学区の無能力者達は目にする。

「行けー！」のままだとヘリ」と焼き尽くされるぞ……！」

青髪ピアスの言葉にビクリと震え上がった操縦士は、仲間の操縦士と無線を取り合い、安全を確認して、それぞれ空へと飛び交つていく。

あとは土御門を待つだけとなつた一機も、土御門が乗り込む寸前で地面から浮いた。

ヘリに飛び込み、そのまま振り返つてヘリから上半身を乗り出し、下に向かつて手を伸ばした。

もう既に、青髪ピアスの身長では、手を伸ばさないと届かない程にまでヘリは高度を上げていた。

「掴まれ……青髪……」

もつ少し手を伸ばせばつかめるのに、青髪ピアスはさうしなかつた。

何故か、土御門に優しく微笑みかけて、

何か言葉を放つた。だが、土御門はヘリの駆動音でそれを聞き取る事は出来なかつた。だが、唇の動きで、何を言つてゐるのか、大体は想像できた。

まだ、やるべき事はある。

そして、土御門の手では、届かぬ程、高度を上げ、ヘリは進路を変える。

土御門は、そのまま、姿の小さくなる青髪ピアスの姿を見ている事しか出来なかつた。

ヘリの機体を思いつきり拳で叩く。土御門の咆哮が、学園都市の上空で響きわたつた。

垣根が動いた。

ヘリを丸ごと焼き払うために、翼を大きく開く。

そこから、2本の光線が、ヘリに向けて、翼から発射される。

次の瞬間、2回の爆音が響きわたり、垣根の放つた光線が中心から引き裂かれていく。

「お前の相手は、俺だろ？が

2丁の銃口から煙を噴き出しながら、青髪ピアスが垣根の前に立ち塞がる。

ピアスは、もう外した。

彼を取り巻く鎖は、既に外れている。

（もう、失う物は・・・何も無い・・・）

第2位と、第6位が、激突する。

第2位VS第6位

神夜は、背中に少女を乗せながら、裏の路地を疾走していた。

出血量からして、あと10分つて所だろうか……とにかく、早めに臨時設営の救急テントまで運ばなければ、

「恭介……まだ、大丈夫……だから……」

「アホ、何も話すな血出るぞ」

もう既に、意識が朦朧としているのか、霧溪の口調は途切れ途切れになっていた。

「放つておいても……良かったのに……なんで、そんなお人好し……なの」

「何言つてんだ、10年も一緒に居た仲じゃねーか」

神夜が、笑みを交えて、そう言った瞬間、

突如、天空から現れた飛来物が、神夜達の横に着弾し、土を巻き上げながら爆風を放つ。

形も大きさも小規模だったとはいえ、その威力だけで一人を軽く吹き飛ばした。

神夜は霧渓と離れた場所で、土の地面に横向きで激突した。

幸い、土だつたため、意識は飛ばなかつたが……

「霧……渓……？」

ゆっくつと、体を起き上がらせる。火災と煙でオレンジに染まつた空を眺めながら、

「クソ……何だ……、今の……？」

（先程から学園都市に届く謎の飛来物、確かに学園都市は上空で迎撃してゐるハズなのだが……）

こんな事を考えていても答えなど当然の如く浮かび上がつてこない。

（それより、まず霧渓の事探さねーと……背中の傷が悪化してたらマズイ……）

そう思い、霧渓搜索へと乗り出そうとした瞬間、

神夜の足に、何かが当たつた様な気がした。

先ほど飛来で土埃が舞っていたため、余り周りが見えなかつたのだ。神夜は目を凝らすと、

「何だよ・・・コレ・・・・」

そこに、あつたのは、確かに、人間。

何十という人間が、地面に倒れている。

その時、神夜を見つけた霧渓が、おぼつかない足取りで神夜の方へ近寄る。

「きょう・・・す、け・・・?」

「見んじゃねえ」

神夜は霧渓の目を塞いだ。

それほどまでに、残酷で受け入れがたい光景でもあつた。でも、次の瞬間、その残酷さを踏みにじるように、一人の人間が神夜の前までやつてくる。

「これで分かつただろ、戦争は犠牲無しには成立しない。戦争とはある意味、犠牲をつくるために起きた事件……とでも解釈できる」

神夜の目の前に、防護服のよつな駆動鎧パワードスーシを着た人間が、そう話した

「……誰だ」

「潮岸、とでも言つておこいつか。学園都市統括理事会の一人、担当する分野は、『軍事』だ」

（統括理事会……とはいへ、味方とは言えなさそうだな……）

そう悟つた神夜は、霧渓に、小さく耳打ちする。

「……こを直ぐ抜けた所に、臨時設営の救急テントがある。俺が後ろ守つてやるから、辛いかもしんねーが、一人で走つて先に向かつてくれ」

「ホント、じめんね……必ず、帰つてきてね」

「気にはんな、必ず帰つてくるから、俺が帰る頃には、その心配症直してくれな」

ぽん、と霧渓の背中を軽く押した。霧渓が走り出したのを感じた

神夜は、潮岸と霧渓のちょうど中間辺に立ち塞がる

「いいのか、この戦争に置いて、女子を一人にさせるのは余りにも
酷だぞ」

「お前らの・・・せつた方が、ずっと酷だろーが」

「いや、違つ

潮岸は、駆動鎧パワードスチル越しにでも伝わって来る、邪悪な笑みを浮かべて、

「ひひひ意味だ」

潮岸は、右手を挙げた。

次の瞬間、圧倒的と言える程の数の武装集団が、武器を持って、
神夜の周りを囲む。

「...」

霧渓も、当然の如く、拘束される。彼女は戦闘向きの能力では無いので、じついう数で圧倒される場面ではまるで歯が立たない。

「霧渓！－！」

「おつと、動くなよ。標的ターゲットはお前だからな、神夜恭介。お前が一歩も動きさえしなけりやあ、あの女の子は開放も考えてやる」

神夜は、潮岸を睨んだ。

彼自身、そのまま潮岸の警告に従う事にした。だが、何かのはずみで、足が少し動いた瞬間、

本来の目的であるハズの神夜恭介では無く、霧渓に銃口を向けた人間が、そのまま何の迷いもなく引き金を引いた。

銃聲音が響きわたる。そして、銃弾は、霧渓の腕をかすった。ただそれだけで、霧渓の腕から血がにじみ出る。

「て、メエ！－！」

「おつと、誰もお前に撃つとは言つていない……お前に課せられる使命は、このまま動いてあの少女が犠牲になるか、それともこのまま俺に拘束されて死ぬか」

もう、この時既に、潮岸の話は神夜の耳には一ミリも入っていないかつた。

激昂した神夜が、歯を折りそうな程噛み締めた。

「ダメ！恭介、『アレ』を使っちゃ！」

霧渓が、力一杯に叫んだ。もつそれすらも、神夜の耳には入らない。

直後、嵐のような風が、潮岸を装甲ごと吹き飛ばした。

「ぐあっ！」

潮岸は、決死の力で頭をフル回転させる。

（ど、どどどういう事だ！？神夜恭介。資料によればレベル0、最低レベルの高校でも頭が悪いランキング1、2位を争う程のクズ中のクズじゃないのか！？）

そんな神夜を、覆っているが、

(何だよ・・・・あの、『黒い炎』・・・は)

それはまるで、幻想的な色だった。

真っ黒に染あがる漆黒の炎が、神夜を取り巻く。

その時、潮岸の仲間の方から、叫び声が聞こえた。

「潮岸さんー!」命令を!—

「殺せ!—その女を骨も残らんよ!に殺し须くせー!—!」

次の瞬間、動いたのは、神夜。

彼から放たれた漆黒の炎が、霧溪の周りの武装集団を吹き飛ばす。霧溪を上手くくぐり抜けるように

そして、武器、仲間すらも失った潮岸の前に、神夜が立ち塞がる。

「ひ、い・・・び、びつとでもじるよ、化け物オオオーーー！」

「ひ・・・」

神夜は唇を噛んだ。拳を強く握りしめる。

「化け物はお前の方だろ。人を平氣で殺す、悪魔が」

神夜は、拳に炎を宿した。

真つ黒な異質の炎は、そのまま潮岸を焼き切る。そう思われたが、

霧渓の手が、神夜の片方の手を掴んだ。

「霧渓・・・」

そして、神夜は目で潮岸を牽制した。

潮岸は、泣々ながら、その場を去っていく。

「『』みんな、怖い思いさせちまつて」

「ねえ、ほのびこひじりのね・・・なんていうか、慣れてるから・・・

「……つ、行くか。早くしねーと

そう言って、もう一度霧深を背中に乗せた

あの学園都市最強の能力者、一方通行とも対等に戦い、一時は優勢ももつれ込む事にも成功した第2位、垣根帝督は、額に汗を浮かべていた。

（冗談じゃねえ・・・なんであんなバケモンが学園都市にいやがるんだ！？）

翼で林をかき分け、速度にして270kmという速度で林を突き進む。今の彼には『人間』という概念は存在しないので、髪が揺れる程度で移動に何の影響も無い。

でも、

瞬間、垣根の横の視界に変化があった。

垣根は6枚の翼で今持てる全ベクトルを注ぎ込み、最大の威力の翼を振るつた。

だが、その翼は止められる。

青い髪の少年によつて。

「くつ・・・」

青髪ピアスはそのまま拳を垣根の顔面に叩きつけた。

瞬間、周りの林が風圧でなぎ倒され、垣根の体は100m、200mという単位で吹き飛んでいく。地面に体を激突した尚も、砂埃を荒らげ、地面を削つていく。

「よつぽど、おめーの方がバケモンじゃねーか

青髪ピアスが垣根の心を見透かしたようにそう言い放つた。そういつしてゐ間にも、400m先で垣根が瞬時に立ち上がり、翼を使って暴風を生み出す。

その暴風によつて周りの木々は根ごと吹き飛ばされ、何十本といつ根の木が一緒に青髪ピアスに襲いかかる。

だが、

垣根は一瞬瞬きまばたきをした瞬間、光線が暴風を中心から引き裂いた。

「ちつ、ひづ

垣根は舌打ちする。攻撃は全て防がれた。

（後は様子を見ながら未元物質で攻撃を混じえながら時間を稼がねーと）

その出来事、約1秒半。

それだけの時間なのに、垣根の視界に何かが映つた。その影は、垣根の背後に移動する。

わずかに視界に捉えたのは、『青い髪』

400mという距離を一瞬で詰め寄る化け物に、垣根は自信の能力を使い、この世には存在しない物質を使い、剣と言つことは程遠い黒い鋭利な棒を、青髪ピアスに横から叩きつける。

その鋭利な棒は、青髪ピアスの体に触れた瞬間、

凄まじい轟音を荒らげ、粉々に粉碎した。

「なつ、これは鋼鉄・・・いや、ダイヤモンドすらも切り裂く最強の刃のハズ。なんで、テメエは、切り裂かれねえ・・・？」

「決まつてんだろ。俺の能力だ」

一瞬、垣根の脳裏に何かがよぎった。

（あの距離間の移動、空間移動・・・いや、あの拳の威力・・・それに今の攻撃の弾きよつといい・・・まさか、奴もベクトルを！？）
テレポーター

これまで考えて、やがて垣根の脳には、一つの能力が浮かび上がった。

（いや、何処かの闇の噂で聞いた事がある・・・今や姿を消し、幻の存在となつた学園都市第6位は、どんな攻撃も受け止め、攻撃にしても威力は最高峰を誇る・・・まさか、奴の能力は、『肉体強化最終進化系、『^{パーフェクトアーマー}完全装甲』か！？）

だが、時すでに遅し。

青髪ピアスに顔面を殴られ、地面に叩きつけられた。

威力だけで、クレーターのよつた小さな小さな穴を作る。

だが、垣根はまだ生きていた。

「俺は・・・この程度では、死ない・・・」

「なら、何度も殴つてやるぞ」

青髪ピアスは垣根をもう一度殴りつと、胸元をつかんだ瞬間、

あらうじとか、青髪ピアスの手が垣根の体にめり込んだのだ。

「！」

「ハハハツ！！俺はホログラム！もう俺の体では無い！」

直後、太陽の光が具現化した。あの一方通行アクレラレータにも放つた、最強の殺人光線を、

「お前には一切の攻撃が通じ無い・・・なら、その盾を無くせばいいのさ！お前の盾を腐敗させる、最強の光線でな！！」

まさに、絶体絶命とはこの事。

次の瞬間、青髪ピアスに光線が襲いかかった。

戦時中の日本

「くたばれ、バーフェクトアーマー
完全装甲」

垣根の声と同時に、天空より6本の黄金の光線が青髪と垣根を通過する起動を描く。

青髪ピアスの最強の装甲をもつてすれば、そのままでも十分な盾となるのだが、如何せん相手は垣根帝督。彼の持つ新物質をまともに食らえば、どうなるか分かつたもんじゃない。

青髪ピアスは腕に力を込め、垣根の胸にめり込んでいる腕を引っ張ろうとした。だが、

抜けない・・・。

「ハハハ、そういうモンなんだよー・そつじゃねーと意味がねーだろ
ウガアアアーー！」

(やはり、この力しかないのかー?)

青髪ピアスは第6位の力を爆発させた。

トーマー めり込んでいる腕を最終段階まで肉体強化する。そして、『完全装甲』となつた腕に全力を注ぎ込む。

11

次の瞬間、垣根の胸が弾け飛んだ。

爆音が辺に響き、土埃が舞う。

青髪ピアスが傷だらけの顔をなんとか動かし、起き上がる

もう既にこの場に、垣根は居ない。

（ちつ・・・・今は、逃げるためのフェイクだつたか・・・）

青髪ピアスはそこらへんに落ちている自分の銃を拾い、空を見た

この黄金の空の中、かすかだが、ロシアの方向に、何か巨大な塊が天空に昇っているのがわかる。

「なんだ…・・・・・あれば…・・・・・?」

青髪ピアスは眉をひそめた。だが、今は戦争中。何が起きててもそれほど驚きはない

（ちきしょう・・・早くアリスちゃんを探せにやいけくんのに、また余計な事で時間を潰してしまった・・・）

そして、青髪ピアスは再び動き出した。

神夜は、霧渓を背中に乗せ、目的地まで走っていた。

霧深の額には汗が大量に浮かんでおり、もう意識を失つてもおか

「だ、だいじょうぶ・・・だよ。」

明らかに大丈夫な状態ではなかつた。神夜の服を掴む手も段々と緩んでいくのがわかつた。

「ちきしょつ・・・た、頼む。お願ひだから、助かってくれ、頼む」

もう自分で何を言つているのか全然わからなかつた。ただ無我夢中で走る。

そんな時、銃声音が響きわたり、神夜の直ぐ足元の地面に命中する。その威力ではじけ飛ぶ石や砂利の破片が、神夜の足首に突き刺さつた。

「ぐあつッ！…！」

体勢がよろけた。そのまま霧渓を放り出してしまいそうになつたが、なんとか踏みとどまる。

だが、悪夢はそれだけではなかつた。

前を見ていなかつた一瞬の隙を突かれ、神夜の周りに一斉に武装した人間が神夜を囲む。

最悪だ。

神夜は常に人に命を狙われる存在だった。
でも、今は霧渓も居る。しかももう危ない状況なのに、本当に、
最悪だ。

一斉に神夜に銃口を突き付ける。それはつまり霧渓にも銃口を突
きつけられている事になるが、360度全方位を囲まれていて、ど
うしようもない。

もう既に勝ち誇ったとばかりに、とある一人が口を開いた。

「終わりだ。化け物。確保も人質もねえ、テメーにはここで死んで
もらうだけだ」

「今はそれどころじゃねえんだよ！頼む、もう霧渓があぶねえ！！
頼むからどいてくれ！」

「誰に口聞いてんだ、あア？ テメエみてーなバケモンと人間が対等
に話出来るっても思つたか？」

「お願いだよ！ 霧渓にはまだ死んで欲しくねえんだ！」

「黙れ」

「ちくしょう、頼むよ・・・お願ひだから・・・まだ、失いたくねえんだ・・・まだ、霧渓の笑顔が見てえんだよ・・・今だけでいいから、そこを、どいてくれよ・・・」

目尻につつすらと涙を浮かべた。

最後はもう涙声になる。

だが、神夜の強い願いすらも、たった一言でねじ伏せられた。

「うぜえ

拳を握つた一人が、神夜の顔を思いつきり殴りつけた。

鈍い音と共に、神夜は地面に倒れ、霧渓は地面に叩きつけられる。

「きょう、すけ・・・！」

霧渓は、ふらつく体をなんとか動かし、神夜の方を見た。

ちょうどそこでは、神夜に最後のトドメを指すため、殴った男が拳銃を神夜に突きつけた。

男は、引き金に手を掛ける。

霧渓は、何も考えず、走り出した。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

顔面を思いつきり殴られ、神夜は後ろの地面に転がった。

霧渓を持つ手も力が抜け、霧渓を放してしまった。

神夜が前を向いた時には、既に男が銃口をこちらに向けていた。

全身に、寒気が走る

「残念だつたな、バケモンみてーなお前を助けるために、犠牲になるだろう可愛い彼女と共に、死んでいけ」

神夜は、目をつぶった。

次の瞬間、容赦なく銃声が響きわたった。

だが、一向に神夜から生気が抜き取られない・・・

おそれおそれ、彼は目を開けた。そこには・・・、

少女が、少年の前に立ちふさがり、銃弾の身代わりになつた。

少年の目の前で、悪夢の血がはじけ飛ぶ。目が大きく開いた。呼
吸も、思考も、動きも、全てが止まつた。

殺戮

神夜の目の前で、血飛沫が飛んだ。

「…………つ、つあ」

なんて声を出したら良いのか分からぬ程、神夜の頭は真っ白になつた。そして、倒れる霧渓を、本能的な動きで神夜は受け止めた。

「…………ようやく神夜の脳の処理が追いついた。今何が目の前で起ころっているのか、神夜は思い知る

「お、おい…………霧渓」

「…………ごめん、ね……私の能力じゃあ、貴方を…………助ける、事は…………」

霧渓の言葉を最後まで聞き取る事が出来なかつた。これは、霧渓が力尽きたのではない。

莫大な感情が、神夜の頭をパンクさせていた。

霧渓の言葉を理解する脳なども他の感情で埋め合わされている。

「くっ、」

強烈な激痛が、神夜の目の辺で起つた。

「この時、彼の目に『黒いモヤ』が掛かつた事は、神夜自信では理解出来ない。

同時に、銃を再びリロードした男が、神夜に再び銃口を向けた。

「俺の命令はお前を殺すこと。たとえ銃弾が届かなかろうがはじかれようが、なんどでも俺はお前に銃口を向ける」

死んだな。

そう周りで男の味方として来た人たちはそう思つた。

そして、容赦なく銃声音が響きわたる。

神夜と霧渓の人生はここで終わつた。

誰もが、そう、思っていた。

「な、なんだよ…………？」

震えた口調で、そう言つた。

「なんだよ、聞いてねえぞ！－！なんで、なんで、こんなレベルのゴミクズに・・・・黒い、炎？」

神夜のまわりに、黒い炎が彼をまとう。

そのとき、彼が片手を開いた。そこから落ちてきたのは、粉々に潰れた銃弾が地面に落ちた

「て、テメエ・・・・人間・・・・か？」

神夜は答えない。次の瞬間、

神夜は、前を向いた。その彼の眼の色が、白と黒が逆転していた。

その目を見た瞬間、

体のまわりから黒い炎が噴き出す

黒い炎に一瞬にして飲み込まれた人間たちを見て、銃口を神夜に向ける男は顔中に汗を噴き出した

「ねこ、なんか・・・・」

次の瞬間、神夜が片手で男の首を持ちあげる。

「がはッ、！」

物凄い力が男の首にかかり、首が砕けそうになる。

銃など、苦しみで手から軽々しく落ちた。

これが、神夜の味わつた・・・苦しみとこうやうか・・・

普通の人間と目の色が真逆になっている
ところでも
人間じゃない。

男は神夜の目を見た。

「なんか・・・・・言えよ」

神夜は、
口を開かない

次の瞬間、神夜は、ようやく重たい口を開いた。

q h t w

直後、神夜の手に、黒い炎が集まる。

そして、その手を男に殴りつけようとした時に、前に出した。

黒い炎の柱が、何kmという単位で雲を突き抜けた。

誰もが、その炎を目にす。

一直線に雲まで伸びる黒い炎を、

同時刻、

「何ですの……あれば……？」

白井は、傷だらけになつた顔を上げて空を見た。炎といつより、『黒い光』といった方がいいかもしない

同時刻

「なんだ・・・・・あの、光は・・・・?」

グループではなく、個人的な理由としてこの戦争に参加していた
海原光貴は、そう独り言を言い放った。

神夜は、重たい頭を上げた。

「くそ・・・俺は、一体・・・？」

目の色も元に戻り、思考も安定している。

（また、使っちゃった……抑える、そう誓ったのに……！）

彼は地面を叩いた。

そこで、神夜は、霧渓のことを、思い出した

「霧、渓！」

神夜の5m先に、霧渓は地面に倒れていた。あわてて駆け寄り、頭を膝の上に乗せる。

衰弱しきっているが、意識はある

「恭・・・介？」

「ちくしょう・・・なんで、いつもいつも、お前が・・・？」

下を向く神夜の腕を、彼女は掴んだ

「大丈夫・・・これは、私が勝手にした事・・・だから・・・」

霧渓が、そう言った瞬間、

ガサガサ、と神夜の後ろの草が音を立てた。

神夜は霧渓を後ろにして振り向いた。そこにいたのは、意外な人物であつた・・・

「あ、青髪・・・？」

「お、おい・・・？」

青髪は、続ける。

「なんだよ・・・今の、黒い・・・炎は・・・？」

神夜の呼吸が、止まつた。

決断

「な、なんや……その、黒い炎は？」

神夜の頭の中が真っ白になる。

何もかもが終わつた……と悟つた神夜だったが、一瞬で霧渓の状態に気づいた青髪が慌てて駆け寄る

「彼女……何があつたん！？」

「……俺を庇つて右腕に銃弾を食らつてゐる

ぐつたりとしている霧渓を見て、青髪は彼女の首の脈に触れた。

「……脈は弱いがまだある。彼女、腕に銃弾を食らつてござらいの時間が経つんや？」

「ほんの、3分程前だ。でも、それより前に背中にケガを負つてゐる、野営の診療所まで運ぼうとしている時に……こんな事に……

「ツ

チクショウ……と神夜は悔しそうに下を向いた。

「俺は、たつた一人の人間を助ける事も出来ないなんて……情けねえ……なんて情けねえんだ……」

青髪ピアスは、霧渓の脇腹の辺に手を置いて能力を操作した。

「関係の無い神経に刺激を俺の能力で与えといった……一瞬だが、痛みもやわらぐ……」

そして、下を向く神夜に、青髪は少し微笑んで肩に手を置いた。

「気にせんでいい……俺もおんなじモンや。」

最後に気にしなくていい……と神夜の肩を叩き、

「お前もあれほど黒い炎を使えるんのと同じよう、学園都市最高クラスの階級を持つても、出来ねえ事は山ほどあるんや」

「……お前、まさか……」

「ずっと隠してすまなかつたカミちゃん……俺は学園都市レベル5の第6位なんや……」

正直、神夜に事実を告げるのは怖かった。

こんなちっぽけな事実だけで、友達が消えるとずっとと思い込んできた青髪ピアスにとって、今の発現は、どんな勇気が必要だったのかは一目瞭然である。

ふつと軽い笑みを取つた神夜の行動は、青髪の考えていた事と真逆の反応だった

「お前の事は、なんでも知つてゐるつもりだった……でも、お互いいっこまで知らない事づくしだつたとはな……なんだか、逆に笑えてくるな……」

「……嫌悪しないんか?」

「俺もお前と同じような境遇にいる身だ。お前の能力を隠したいっていう気持ちは嫌でも分かるし、実際こうして俺もお前やみんなに能力がある事を伏せて生きてきてる……なんつーか、お互い様つてやつだな」

「カ///やん・・・」

「・・・それより、ビリッたらいい・・・? 霧溪は?」

「今は一時的に鎮痛はあるが、また痛みが襲ってくる。病院に連れていく時間は無さないや・・・」

「じゃあ、どうすれば・・・?」

「霧溪ちゃんは、俺が責任を持つて治す。レベル5は、数年前に一斉に集まって医療技術の講習を受けたことがあるんや・・・ま、一アラレータ 方通行や麦野なんかの猛者は当然の如く集まらんやつたが、」

「具体的には・・・どうやって・・・?」

「ん、カ///やんには悪いが、今はこれしかないんや・・・」

青髪は次の瞬間、驚愕の言葉を口にした

「・・・・腕を、開く」

「俺が、腕を開く」

神夜との間に少しの間静寂が生まれた。そして、神夜は低く答えた。

「…………大丈夫なのか?」

「少なくとも講習は受けた。実践はやったことがないんやがな……」

「

そう言つて、青髪は自分のポケットから小さな円筒形の箱を取り出す。

「今、学園都市第7位を呼んでる。それに、麻酔はこの空襲で底をついてる……全ての意思決定は……霧渓ちゃん、君なんやで」

青髪ピアスと神夜は隣で横になつている霧渓を見た。彼女は、顔中に汗を浮かべながら、静かにこう答えた。

「お願い…………します」

「・・・・・意識のある状態で腕を開くには相当の激痛が伴つんや、それでも」

「いい・・・んです、恭介には色々と迷惑を掛けたし・・・・・ 麻酔を調達するにはまた恭介に負担がかかる・・・ 私には、わかるんです・・・ 今の恭介が痛みにずっと耐えている事ぐらい・・・」

「・・・」

青髪ピアスは神夜を見た。

多少傷は追つて いるものの、いつも通りの表情でいる。けど、それは外見だけで、彼は下手をすれば霧溪以上の痛みを負つて いるかもしれない・・・

「大丈夫なのか・・・・・ カミやん？」

「気にはすんな・・・」

神夜は言葉を紡ぐ。

「ずっと、ずっと・・・俺は霧溪を守つて いる気だつた・・・俺と関わつて いるだけで、霧溪には命の危険だつて ある。銃口を向けら

れた事なんざこの両手の指で数え切れねえ程ある。でも、そんな危険な状況からずつと、霧溪を守る事に成功した・・・・なんて気だつた・・・・。でも、実際は違つた。こんな大戦が起きて、そこから中から俺を殺しに来た連中に対し、俺は私情で霧溪を傷つける事しか出来なかつた・・・・。情けねえ、」

そして、神夜は青髪達に背を向けて

「だから、俺の事は気にすんな・・・青髪、後は頼んだ・・・。」

そう言つて、神夜は歩きだした。

「待て！お前の体の状況じやあこれ以上の戦闘は無理や！それに、この大戦でお前の危険度は一般市民の俺にまで届いてる程だぞ！何百、いや・・・何千という軍勢がお前を狙つてゐるかもしけないんやで！」

青髪ピアスの怒号にも勝る声など、神夜には届きはしなかつた。

たつた一言で、青髪ピアスは打ち砕かれる

「気にはんな。『俺たち』は、前に10万もの軍勢を敵に回したこ

ともある。」

そう言って、神夜は再び歩きだした。青髪ピアスは、その人物を、
これ以上止める事は、出来なかつた・・・

神夜を止める事に失敗した青髪ピアスだが、いつまでもそれを引きずっている訳にはいかない・・・もうすぐ、学園都市第7位が来る。

青髪ピアスは、ずっとずっと、心に何か引っかかる物を残したまま生きてきた。

それは、とある少女との別れだった。

決して長くはなかつた期間だったが、同じ境遇同士少しかは分かれ合えた人間だ。

だが、突然、青髪ピアスはその少女から姿を消した。

「もう……3年……か、」

そう言いながら、青髪ピアスは携帯電話を取り出した。

（もうすぐ削板が来る。最後に、これまでの愚行を謝んねえと……）

青髪ピアスは、携帯の電話帳を開いた。

そして、相手を確認し、通話ボタンを押した。

確かに、そこには、こう書いてあつた。

御坂、美琴と……。

再会

「…………、そ…………さすがに本場の戦場つて所かしら」

御坂は弾き出したコインの弾道を眺めながらそう呟いた。

一直線に雪道を弾き、着弾点で大きく雪が爆発した。超電磁砲に
よつて生み出された暴風が雪を巻き込み吹雪のよつて辺を舞う。

御坂は慣れている仕草のように乱れた衣服を軽く直し、顔にかかる髪を整えた。

次の瞬間、御坂の携帯電話が唸りを荒らげる

「つおつ！？け、携帯！？」

御坂は慌ててポケットを探り、携帯を取り出した。折りたたみ式の携帯を開き、送り先を確認する。

直後、御坂の体に寒気が走った。

画面の中心には、『青髪ピアス』という文字が入っていた。数年前に、彼が勝手に登録した名前だ。それつきり、連絡が途絶えたのを理由に、御坂は面倒なので名前をそのままにしてあつたのだ。

(こんな時に、まさか……)

御坂は通話ボタンを押し、恐る恐る耳に当てる。

「もしもしし・・・?」

『・・・良かつた、通じた』

確かに、青髪ピアスの声だ。未だに覚えてい

『ちよつと、アンタ・・・今まで何処に居たのよー?』

『悪いい・・・ずっと、学園都市にいたんや』

御坂は眉を潜めた。

『アンタ・・・・その喋り方・・・』

『ああ・・・・御坂嬢と会わなくなつて、ボクは名前も封じたし、喋り方も変えた。第6位つて事を伏せておきたかったんや、でも、ありがとうな御坂嬢。御陰で今の今も人間を特定されずに済んでる』

「……ひーさすがに私だって『約束』ぐらごと守るわよ。」

『意外とやりそつだからな~』

「うつさいー」

『フフ、でもさすがに大霸星祭の時はびっくりしたな~。だつて突然御坂嬢がボクの学校に観戦しにくるんやもん、でも、気付かなかつたみたいやね。ま、どんだけカミやんの事が好きなのかつてのが伺えるんやけど』

「ああ、もうー…そこは触れなくてよろしいーーー！」

『まあまあそお嬢様が声を張り上げないで。今日は用件があつて電話をさせてもらひたんや』

「用件?」

『や。とある少女の治療をしたいんやけどね、腕に銃弾を食らつてる。常盤台の制服着てるから、もしかしてつと思つた次第なんやけど』

「も、もしかして黒子ー?」

『いや、霧溪つて子らしき。』

「……」

『どうしたんや……？御坂嬢？』

「私の、クラスメイトよ……」

『マジですかい！？』

「あんな物静かで突然的な行動をしない子が、どうして……？」

御坂の声に悲しみが混ざる。

『どうも、カリヤ……いや、神夜の事を庇つて身代わりに銃弾を食らつたらしい……』

「……あの、バカ！なんでそんな事……」

『どうやら、知っているみたいやね。こつちも『第1次学園都市異能力戦争』とか言われているらしい……』

「知ってる。携帯のワンセグで見たわ」

『全く、『第3次世界大戦』の戦場か『第1次学園都市異能力戦争』の戦場……本当にどっちの方が安全かも分からぬよいうな程までに滅茶苦茶になつてゐる……』

「黒子は……？初春さん、佐天さん……その他の人たちはど

うなつて！？

『ウチの学校には警備員アンチスキルの先生がいるんや。その先生が言つてたよ、レベル0は無事全員避難完了、初春は……戦場で風紀委員ジャッジメントとして頑張つてる……白井……』

「ちょっと待つてよ、まさか……」

『現在、行方不明中になつてる……』

電話の向い側で声が途絶えた。じばりくして……よつやく声が聞こえた

「わかつた……私もやる事を終えたら、直ぐにそつちに向かう」

『助かる、今学園都市にレベル5は一人しかいない……御坂姉がそう言つてくれて助かつたよ』

「必ず、霧溪を治して」

『わかつてゐる。必ず、治すからな』

そう言つて、青髪ピアスは通話を切つた。今は、御坂よりも、目の前方を優先しなければならない

(大丈夫だ。必ず助けてみせる)

学園都市第7学区は、火の海に包まれていた。

建物が燃え、次々と崩れる。

そんな蜃氣楼すら見えそうな程炎で空気が揺れる中、一人の男が
ゆがんだ空氣の中をただ一人突つ立っていた。

黒髪にチャーンの付いたパークー、ズボンはどこかの高校のスラ
ックスを着込み、パークーの裏から伸びたイヤホンが男の右耳に伸
びていた。見た目180cmぐらいの長身の男は鋭い目つきで当た
りを眺める。

と、同時に銃声音が当たりに響いた。

銃口から放たれた銃弾は一直線に長身の男へと向かつた。だがそ

の銃弾は男をそのまま通り抜けた。

まるで、男が空氣だつたかのよつて、無残に銃弾が突き抜けた。

「さすがは第1次学園都市異能力戦争を勃発させた男、素直には倒されてもらえんか・・・」

前方30mの地点に、その声を発した男はいた。長身の男は静かに男を睨みつける。

「何の用だ？」

「おつと、それはこちらのセリフのよつだフレイ。学園都市側のお前が、わざわざ『神威』とかいう馬鹿げた組織を引き連れて何を企む？」

「愚問だな。いい加減革命を起こさねば、この街は滅びる。その目的の達成のためには、俺一人の力では足りない・・・そのための組織だ。俺はその一員として・・・いや、俺にはそんな組織のメンバーは務まらんな。俺が務めたのは、この戦争の引き金・・・それだけさ」

「クールだねえ、フレイ。クールすぎて寒氣がするぐれえだよ」

男は口に笑みを含みながら、銃を取り出そうと、腰に手を伸ばそうとした瞬間、

いや、正確には取り出そうと指を動かすために運動神経に信号を送るために脳が動き出した瞬間、

フレイは、男が確認する間もなく後ろにあつた30m程のマンションの屋上へ移動した。

ようやく確認が出来たのは腰に手が伸びて銃に手が触れた瞬間だつた

「残念ながら、俺には銃弾を防ぐような力は持っていない」

「何の事? 僕はただキミにある計画を云々と紙を取り出そうとしたんだけどね」

「…………」

「ああ、さっきのは挨拶だよ。戦争の引き金を引いた男の実力はどんな物か知つておきたかったからね」

男は精一杯の笑顔でそう答えた。直後、フレイは30m程の高さから何の迷いもなく飛び降りた。

ポケットに手を突っ込んだまま、何の対策もなく、

直後に、男は腰から銃を上に向けた。

「馬鹿がアア……空中じゃア身動きがとれねえ……ここので地球の塵になれゴミクズ……！」

男は引き金を引くため手に力を込め、銃口を落下するフレイに向ける

次の瞬間、フレイは男の目の前まで落下していた。

「なつ……！？」

地面まで残り25mもあつたのに、気付けばフレイは田の前まで落としていた。

高度3000mからのスカイダイビングで一瞬で高度100mまで降りれるか?

高さ100mからのバンジージャンプで一瞬で最終落下地点まで
降りれるか?

そんな初歩的な疑問を吹き飛ばすかのよ、フレイはそのまま落
下しようとする。

「んな事だろーと思つたよ」

瞬間、フレイと男を中心にして半径300mが吹き飛んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7916v/>

とある第六位の青髪ピアス

2011年12月27日19時52分発行